

解 答

一

- 1 はず 2 ゆげ 3 とうかく 4 育成 5 解消 6 機転 7 嚴重 8 交配

二

- 1 ア 2 エ 3 ウ 4 エ

三

- 1 オ 2 イ 3 じらい 4 オ 5 イ

四

- 1 エ 2 イ 3 ウ・オ 4 ウ 5 エ 6 北には 7 ア・オ

五

- 1 オ 2 A 生ゴミ B 猫 3 イ 4 ウ 5 ウ 6 オ 7 無

解 説

二

- 1 アだけが「見たり」「聞いたり」というように、動詞のあとについてはたらく「たり」という助詞で、ほかの「だ」は、名詞や、名詞と同じはたらきをする「の」についての断定の助動詞の「だ」です。
- 2 エ以外は「ようだ」という助動詞の一部です。エは、意志や推量を表す「う」「よう」という助動詞です。
- 3 ウは「話」という名詞のあとにつく格助詞の「で」です。ほかの三つは「飛ぶ」「かく」「遊ぶ」という動詞のあとにつく接続助詞の「て」です。「聞いてみよう」などと使われますが、直前の動詞が「飛ん」「かい」「遊ん」などの音便となったときには「て」が「で」と変わります。「見てごらん」と「読んでごらん」とを比較するとその変化がわかります。
- 4 エは「話せる」全体で、可能の意味を表す一つの動詞です。ほかの三つは「乗る」「かく」「勉強する」という動詞についた、使役という意味の助動詞の「せる」「させる」のうちの「せる」です。

三

たとえば、電車の中で席をゆずろうとしてもはずかしくてできなかったり、席をゆずられることがはずかしいという気持ちになったりすることがあります。そんな気持ちを考えてみましょう。

- 1 「ここで／ぼくが降りたら／バスは空っぽになる」にそのときのぼくの気持ちが書かれています。空っぽになるバスそのものを案じているわけです。「バスは肩をすくめるようにして」ということばからも、ぼくがバスを人間のように見ていることがたしかめられます。
- 2 このときの雨はとりたてて、ぼくやバスにきつくあたってくるわけでもやさしいわけでもありませんので、「きびしい」「おそろしい」「あまい」はあてはまりません。「つたない」は下手という意味ですから、これもあてはまりません。
- 3 「恥」という漢字の動詞を考えてみましょう。「恥じる」「恥じらう」「恥じる」「恥ずかしがる」などが考えられます。「恥じる」は深く恥じて反省することですから、恥ずかしそうなようすを見せるという意味の「恥じらう」がふさわしいでしょう。多くの人を乗せるためのバスでありながら、お客が乗っていないことを恥ずかしがっていると、ぼくは思ったのでしょう。
- 4 「弱点をさらけだした同志のように」ということばに着目しましょう。この「同志」とは、同じ思いを持った者ということです。ぼくは、バスを空っぽにさせないためにバスに残ったわけですが、この運転手には、そんなぼくの気持ちがよくわかっていたわけです。てれくさそうな笑いは、運転手からぼくへのあいさつだと考えるといいでしょう。
- 5 ぼくの笑いには、自分の気持ちを見ぬかれてしまったことへのてれくささがこめられています。

四

- 1 「しかし……手入れをしなくなると」と続いていることに着目しましょう。直前に「手入れ」のされた雑木林が書かれています。とくに「雑木林は明るく」ということばがポイントになります。
- 2 「森は……生かしてくれた」ことが原因で、「私たちは……癒されます」という結果が生じます。
- 3 このあとには、黒姫の人口が増加して土地の価格も上がっているという成功例が書かれています。土地の価格を上

げることができればビジネスとして成り立ちます。さらに本文の後半には北海道のスキー場がとりあげられています。こちらは土地を売るわけではありませんが、観光客を集めて自然を案内することがビジネスとして成立することを示しています。

- 4 「日本人の力量」を説明するために、筆者は自分を冬山に連れ出してくれた大学生や、ルバング島から生還した小野田少尉を紹介しています。かれらはみな自然の中で生きることのできる人たちです。かれらの持っていた「知恵」や「技術」が、「日本人の力量」です。
- 5 この「音痴」とは小野田少尉の持っていた知恵や技術を失った者をさします。具体的には、自然とともに生きる知恵を失い、山や里や海で生きる技術を受け取ろうとしない人のことをさします。筆者は自然音痴になった人々に「その技術を受け取らなくていいのですか」と警告しています。
- 6 筆者は日本という国の中に存在する「自然の多様性」を観光などの資源として活用しようとしています。具体的には「北には流水」「南にはサンゴ礁」があると一つの例を示して、観光に生かそうと主張しています。筆者のいう「もう一度日本の山や海で若者が働く」とは、必ずしも、第一次産業をさしているわけではありません。
- 7 ア 「木は必死になり……遠くへまかねばなりません」という前後から読みとれます。イ 筆者は森の手入れを勧めています、植林を勧めているわけではありません。むしろ、原生林の価値を評価しています。ウ 「日本国籍を取得したの」と、日本の自然のすばらしさとは別のことです。エ 筆者は探検家になることを勧めているわけではなく、日本には、自然とともに暮らす知恵や技術が伝えられていたということを「探検家になる……苦勞をしなくてすんだ」と比喩的に表現しているのです。オ 筆者は「……技術を受け取らなくていいのですか」と警告しています。

五

- 1 筆者はそのどよめきを「私の感じ方に同意する雰囲気」と受けとめています。そして筆者は「金魚の死骸を平気でトイレに流す……冷酷な民族」ということばを使っていますが、これは、もともと筆者にそういう意識があったことを示しています。
- 3 「そんな親の行為を子どもたちが目撃したら……考えたことがあるのだろうか」という筆者のいきどおりのあとに、この「どこか生氣のない無表情な子どもたち」と例があげられていることから、筆者が、そのような行為を目にした子どもたちが生氣のない子どもになったのではないかという強引な推論を、それとなく展開していることがわかります。はっきりと因果関係を指摘してはいませんので、「想像した」というイが適切です。
- 4 「ところが」のあとに、このカルチャーショックを受けたことが書かれていることに着目しましょう。それまでの筆者は、金魚をトイレに流すことなどあり得ないと考え、そんな親を、だから生氣のない無表情な子どもができるのだときびしく批判しています。ところが、「カナダではどうするのかと聞いて……トイレに流すのが普通なのだ」と知ったわけですから、たいへんなショックを受けるのは当然です。筆者の主張からすれば、カナダやアメリカの子どもたちはみんな生氣のない無表情な子どもたちになるということになります。そこで、筆者はこれ以後は、文化のちがいを述べることを述べはじめます。
- 5 この「予想」は、筆者の視点に立った予想です。筆者は、金魚の死骸をトイレに流すことを批判していました。
- 6 ここまで述べてきたように、ここで「文化によって違う」と言っているのは、筆者の、トイレに金魚を流すことなどとてもないことだという主張がカナダやアメリカでは通じないことをなんとか論理的に説明するためのものだと考えるといいでしょう。